

# 新世紀ミュージアム

言語学者を育てて世界各地に送り込み、書記法の導入と識字教育に貢献してきたS・L・インターナショナル。その活動実績に基づき、関連団体であるジャールズとウィクリフは、それぞれ、文字の博物館、言語の博物館をもつ。ここでは、前者について背景も合わせて紹介する。

## 文字の博物館

「文字の博物館」は、ジャールズ(JARS)の基地である、ノースカロライナのワクソーにある。ジャールズという名前は、「ジャングル航空無線サービス」Jungle Aviation and Radio Services」の略称からきている。世界では現在、約



博物館外観(写真はすべてArthur Lightbody氏提供)

れていたりと、現在使われている文字のサンプルがあったりする。

この博物館は一九九一年に設立されたそうだが、装置展示一点をのぞき、すべてがアナログである。わたしのお気に入りには、「死海文書」という二〇世紀半ばに発見されたヘブライ語で書かれた聖書と関連写本群の年代推測展示だ。文書の字体が書かれたパーツを、文字の変遷を年代順に並べた板の上でスライドさせるようになっていて、単純な装置だ(下写真)。来館者はこの作業を自分の手でおこなうことで、この文書がいつの時代にしるされたのかを、研究者気分で「解明」することができるようになっている。ジャールズはS・L・インターナショナルの活動に対してインフラ面でのサポートを続けてきた団体である。その気になれば、装置展示を操ることもできたであろうことを思えば、展示デザイン策定の経緯に関心がもたれるが、残念ながら気づいたのは帰国後だった。

## 文字の博物館と言語の博物館

外から見ると小さな建物なのに、なかは情報でいっぱいこの博物館、じつは、他の博物館へのサポートまでしていたりする。現在、バーチャル&訪

七〇〇〇の言語が話されているといわれており、部分訳、全訳を含め、その約三分の一に聖書に関するなんらかの訳がある。これは一九三四年に設立されたS・L・インターナショナルが、聖書の翻訳のために世界各地で言語調査をおこない、識字活動が続いているからだ。例えば、フィリピンのルソン島ポントックのギナン村では、今こそ道がつながり携帯電話が使えるが、一九六〇年代には徒歩でなければ到達できず、一度入ってしまったら外界とは連絡がとれなかった。世界には、もっとアクセスが悪い地域もあったし、今もある。ジャールズは、離着陸場を整備して小型飛行機を飛ばしたり、無線通信設備を準備するなど物理的な面を請け負い、S・Lの奥地での翻訳活動を可能にしてきた。音しかもたない言語に、書記法II文字を導入する活動をサポートしてきたのが、ジャールズの

そう考えると、この団体が「文字」の



あなたも古文書学者になれる? 死海文書の年代分析のシミュレーション展示。隣にあるのは、文書が発見された洞窟の再現展示



手作り感いっぱいの博物館には、漢字がどのように日本語の文字に変化したのかに関する展示も

博物館を運営しているのも、納得できる。

## 二一世紀のアナログ博物館

現在、世界で使われている文字には、アルファベット系、漢字系、その他がある。日本語のカナは、漢字の系統の末裔だ。また、楔形文字、ヒエログリフなど、消滅してしまった文字もある。文字の博物館には、これらのさまざまな文字の歴史がわかりやすく展示されている。例えば、人が文字を刻んでいる光景の再現では、文字の形とツールのあいだにとっても強い関係があることが説明を読まずとも見てとれ、おもしろい。さらに、文字の発達過程が示さ

問博物館を展開するアメリカの「国立言語博物館」は、二〇〇八年から六年間、小さな展示ギャラリーをもっていたが、そのなかには、文字の博物館から借りたという「文字の系統樹」があった。文字や言語は、アナログが装置かを問わず、基本的には情報の展示なので、博物館どうし相互に協力することができ。こう考えると、文字の博物館あらゆる面で最先端を行っているとはいえないか?

文字は言語を書きしるす手段であり、言語がないところに文字は存在しない。そのような観点から見ると、同じくS・L・インターナショナル関連のウィクリフ聖書翻訳協会が運営する「ディスカバリーセンター」(フロリダ州オーランド)は、「言語」の部分を表示しており、文字の博物館の姉妹博物館ともいえる。ここには、ジャールズのサポートで文字が導入される前後の言語の世界、文化や社会のあり方、また言語調査の方法などが、しっかり展示されている。わたしとしては、これらふたつの博物館、「文字の博物館」と「言語の博物館」を隣合わせで一緒に見ることができれば、どんなに贅沢かと思うのだが……。いや、知をえたければ、旅をせよ、ということか。